

令和4年度第1回北海道立近代美術館協議会 議事録

1 日 時 令和4年9月27日(火) 10:00~12:00

2 会 場 北海道立近代美術館 3階 会議室 (Web会議システム Zoom 併用)

3 出席者 【委員】東 尚典、飯田知男、大石朋生、北村清彦(会長)、霜村紀子、中井令、

中村 智、三澤祥子、湯浅万紀子、吉崎元章(副会長)、若原勝二

(計11名 敬称略50音順)

【事務局】近代美術館：立川館長、松田副館長、中村学芸副館長、豊村総務企画部長、

五十嵐学芸部長、土岐学芸統括官、今村総務企画課長

三岸好太郎美術館：齊藤館長、岩上副館長

4 傍聴者 なし

5 議 題

(1) 令和3年度事業実施報告及び美術館評価について

(2) 令和4年度運営計画について

(3) これからの北海道立近代美術館検討会議について

(4) 美術館評価システムの改善について

6 議 事

新任委員・異動職員紹介、館長挨拶の後、会長の進行により議事に入る。

(1) 令和3年度事業実施報告及び美術館評価について

(2) 令和4年度運営計画について

ア 事務局から資料1-1(近代美術館)について説明

イ 質疑・意見

【北村会長】

ただいまの説明に関して、御質問等があれば、お願いします。

【吉崎委員】

今回の報告を聞いて感じたことを3つお伝えしたいと思います。

1つ目は、昨年度購入した作品が、現在活躍している地元の現代美術家の作品ということですが、これはとてもよいことだと思いました。美術をタイムリーにとどめていくという美術館の使命という観点、それから、作家への支援という観点もあります。美術館がしっかりと作品を見て購入しているということで、作家の励みにもなると思いますので、今後もぜひ継続していただきたいと思います。

2つ目は、「へそまがり日本美術展」で、解説文がとても好評だったというお話がありましたが、この解説文というのが、とても美術館活動にとって大切だと思っています。

最近どちらかというと、自由に感じてもらうのがいいという風潮があるのですが、少し前に「怖い絵展」という展覧会が話題になったように、やはり美術館として、なぜこの作品を展示して、何を感じて欲しいかということをしかりと情報として伝えていくということも必要だと思っていますので、好評だったという話を聞いてとてもうれしく思いました。

3つ目として、「フェルメールと17世紀オランダ絵画展」、「古代エジプト展」、「国宝・法隆寺展」など、来館者が10万人を超えるような展覧会を実施していますが、こうした展覧会ができるのは、設備、規模、交通面などから、道内では道立近代美術館しかないと思います。これが多くの道民が近代美術館に期待していることだと思いますが、その役割を今年度は十分に果たしたのではないかと思います。

一方で、最近の札幌芸術の森美術館もそうなのですが、集客性が第一という展覧会も目立ってきていると感じています。学芸員の地道な調査研究に基づく、地域に根差した展覧会もしっかりとやっていかなければいけないと思っていますし、その点では「羽生輝展」はとてもよかったと思います。また、これから行われる「砂澤ビッキ展」と「戦時下の北海道美術展」にもとても期待しています。

また、これから説明があると思いますが、三岸好太郎美術館の「三岸好太郎が生きた時代」展を見て、とても驚きました。近代美術館と三岸好太郎美術館のコレクションがほとんどの展覧会だっ

たのですが、しっかりと時代をとらえて展開している展覧会で、学芸員の知識と力の賜であると感じました。本当に展覧会の内容というものが、学芸員の努力によって深まっていくということを感じた展覧会だったので、お伝えしたいと思いました。

【北村会長】

解説文やキャプションをつけるのは難しいことで、ともすると、美術館業界のみで通用するような難しい言葉遣いになりがちです。もちろん、正確なことを伝えなくてはいけません、小学生にもちゃんとわかるようにですとか、また、小さい文字が見えない方への配慮なども考えて作成し、伝えていくということは大事だと思います。

また、昨年度の美術館評価では、コロナの影響により入場者数など人数的には厳しいところもあり、低い評価になったりしていますが、定量評価では評価されないような部分を次につなげていければよいなと思っています。

【湯浅委員】

私は、北海道博物館の会議にも参加させていただいているので、比較ということになってしまうのですが、コロナの影響によって不可避・不可抗力であったものに関して、どう捉えるかというあたりは、少し気にした方がいいかもしれません。例えば、A B C Dの評価で、Dがあると目立ちますし、努力したにもかかわらず、不可避・不可抗力だったのかというものは分けて考えたほうがいいのではないかと思います。

北海道博物館では、当初の計画になかった項目を別に設けていて、そこで、報告されているものの中に埋もれてしまっている新たな取組みについてわかるように特記しています。そのような工夫も必要なのではないかと思いました。また、事業実施報告書の中の評価資料を拝見しますと、好評だったというコメントがかなり多いのですが、その具体的な内容についてのコメントがあるとよいと思いました。

それから、これから計画を立てる時に、例えば、CやDであった項目はその課題をどうクリアして次の計画に活かしているのかということ、明確にご説明していただければありがたいと思いま

す。

【松田副館長】

評価の課題について、いろいろお話いただきました。ありがとうございました。コロナの中の影響で不可避だった部分をどう考えるか、また好評だったということについて具体的にどういうものだったのか、あるいはCやDの評価についての課題を今後どういうふうにしてクリアしていくのかといったところ、非常に重要なご指摘だと考えております。後程、評価システムの今後の改善の関係のお話もさせていただこうと思っておりますが、いただいたご意見を踏まえて、評価の取扱いについての検討を進めていきたいと考えております。

【北村会長】

評価について、例えば入場者の満足度は高いですとか、アンケートで高評価であるなどの記述がありますが、なぜ評価はCなのか。細かく見てみるとわかることもありますが、評価だけが独り歩きすることはあまりよくないことだとも思いますので、その説明も十分していただけるとよいのかなと思います。

【東委員】

先ほどのお2人の委員の方からもお話がありましたが、コロナのこういう状況の中で、当初の計画がうまくいかなかった部分もあったと思いますが、その中で、いろいろなことを工夫されていたと思います。

例えば、昨日、改めてホームページも拝見させていただいたのですが、工夫もされていて、評価としてもAということで、しっかりと取り組まれていると思いました。コロナの状況もあって、なかなか来館することが難しい状況も続いていましたので、その中で、違った形で近代美術館の取組みや作品に対してのPRなど、アクセスできる方法を作ったということは、素晴らしい取組みだと思います。

また、移動美術館の話もありましたが、私も以前、造形教育連盟の研究大会の時だったと思うのですが、作品の貸出しをしていただいたことを記憶しております。やはり、本物に触れる機会とい

うのは、子供たちにとっては貴重な機会ですので、いろいろな形で実現していただいているということとはとてもありがたいことだと思います。私は、市内ですべて教員をしているのですが、やはり美術館が近くにはない地域の方々にとって、直接、作品を観る機会を作ってもらおうという取組みは、ぜひ今後も大事にしていただきたいことだと思います。

それから、地域文化振興の中で学校との連携という話がありましたが、アートカード等の貸出しもされているとのこと。今は、教科書出版会社もアートカードなどを作って、実際に小学校の指導書の中に組み込み、各学校でアートカードを購入して手元に置くことができるという状況もあります。近代美術館が作られたものをさらに活用するということを考えたときに、PRの方法や内容の一層の更新など、さらに工夫があればよいと思います。そもそも、近代美術館がアートカードの貸出しをしているということをまだ知らない学校も多いと思いますので、チラシ以外の周知方法についてもご検討いただきたいと思います。

【中村委員】

やはり、本物に触れる、直接作品を観るということには価値があると思います。例えば修学旅行や学校の授業の一環で、あるいは、コロナで一人旅が流行っている中で、そういう方々が、この美術館に足を運んでもらおうという機会を作っていくのはとても大切だと思います。

また、観光のコンテンツとしても、そういうものが組み入れられるのであれば、ぜひ、我々も検討して参りたいと考えております。

【北村会長】

先ほど、双方向でのオンラインアート教室について説明がありました。生徒がタブレットを持つような時代になっており、新しい環境の下で美術館が工夫をしながら、オンラインで解説などを伝えていく一つの試みだと思いますが、手応えはどうでしょうか。

【五十嵐学芸部長】

オンラインアート教室は今年の新規事業ですが、昨年、一度、北海道手稲養護学校三角山分校と、オンラインによる事業を実施しましたが、実際に作品を観るきっかけとなるということが大きく、

それを入口に、また美術館に足を運んでほしいという願いもあり、実施しました。

今の小中高生はオンラインで何かを見るということに慣れていて、逆に、すんなり入れるという意見もあります。なお今年度は、7校で実施する予定です。

【霜村委員】

感想なのですが、2つあります。1つは、オンライン動画配信について、「へそまがり日本美術展」など楽しく拝見しました。今の若い世代の方は新聞広告やテレビCMを見る機会があまりないと思いますので、動画配信をすることで、新たな層を呼び込むことにもつながるのではないのでしょうか。動画には、展覧会の裏側を見せるなどの興味をそえられるような内容もあり、ストーリー展開も面白かったので、努力されている取組みと感じました。

展示は会期が終わると見られなくなってしまうので、展示室の動画を残すということも、今望まれているところがあります。会期が終了しても、一部展示を見ることができ、楽しむことができるという意味でも、こうした工夫が必要と感じました。

もう1つは、毎回思うのですが、この事業計画や事業内容を見ると、職員の方がそれほど多くない中で、これだけの豊富な展覧会の数と、教育普及事業、移動美術館やオンライン事業なども対応されていて、大変な努力だろうと思います。内容も幅広いですし、先ほど吉崎委員もおっしゃっていましたが、大規模な展覧会もあれば、収蔵品に根差した地道な調査研究の成果を見せる展覧会もあります。

今の三岸好太郎の展覧会につきましても、その時代と作家と作品と画題、それらすべては、収蔵品を本当に熟知していればこそで、ものすごい研究、企画力だなと感服しています。これはぜひ、企画展とか大きな展覧会で図録に残した方がいいと思うほど、1枚1枚の解説も情報量が多く、学芸員の能力の高さが伺い知れる内容でした。

皆さんが大規模な展覧会を少人数で担当されて、膨大な業務をこなされているということが、この内容から伝わってきますし、時代に合わせて、動画配信やホームページのリニューアルなどの努力をされているということも伝わってきました。

コロナ禍でできなかったことということで評価が低い点もあるのですが、その中でも、新たな取り組みを進めて工夫はされているのではないかと、私が同業者として感じた次第です。

【大石委員】

本当にコロナで大変な中、意欲的な展示をするだけでなく、企画や紀要など、素晴らしいものを出していただいている、本当に近代美術館の学芸員の皆様方に頭が下がる思いです。

1つお聞きしたいのですが、この移動美術館やオンラインアート教室などは、非常に魅力的な取り組みだと思うのですが、これからどれくらい継続されるのかというビジョンのようなものを美術館の方ではお持ちなのでしょうか。今後の展開など、もしお聞かせいただければありがたいです。

【中村学芸副館長】

移動美術館とオンラインアート教室の今後の展望ということですが、まず、オンラインアート教室につきましては先ほど申し上げましたように、今年から始まった事業であり、今年はある種の試行的な意味を持ちながら、学校の先生や生徒たちの反応なども聞きながら、それを取り込んで、今のところは、来年度以降も継続的に行っていく予定です。

また、移動美術館は、これまで大変長く行ってきましたけれども、様々な経費的な面なども含め、今後どのように展開するかというところを改めて今、検討しています。

【大石委員】

アートギャラリー北海道の取組みがあると思うのですが、その事業と連動して、他の美術館とも一緒に移動美術館を展開するという事は考えていないのでしょうか。

【中村学芸副館長】

アートギャラリー北海道の趣旨が、道内各地の様々な美術館等のコレクションを紹介するということがテーマですので、今のところ、移動美術館事業とは切り離して行っています。

アートギャラリー北海道も、来年度以降、様々な形で展開していきたいと考えているところです。

【大石委員】

北海道はとても広くて、私も旭川に住んでいますが、旭川から稚内まで行くとなるとかなり距離

があります。同じように釧路であっても、別海や羅臼までだとかなり遠いと思うのですが、その間を埋めるような形で、近代美術館から羅臼や知床まで行くとなると、かなり大変かもしれないのですが、やはり、そちらに住んでいる子供たちにも、本物の美術を見る機会を作ってほしいと思っています。

私の実感としては、旅行で美術館に行く方、例えば北見から旭川美術館に来たり、あるいは帯広から近代美術館に来たりする方もいるという話も結構聞いています。旅行の傍らで美術館に寄るといような機会に、本物の美術を見せて興味を持ってもらうということが非常に有効なのではないかと思っていますので、ぜひ、継続していただくとありがたいと思います。

あと二つ、思ったところを述べさせていただきたいと思います。

一つは、「フェルメールと17世紀オランダ絵画展」も素晴らしい展示でしたが、「古代エジプト展」の方の動員数が多かったのは、コロナも悪いことばかりではなくて、旅行したいけれどもコロナ禍でなかなか旅行ができないという方には、エジプトに対して興味を引いて、ちょっとした旅行をした気分になるということも大きかったのではないかと思います。

例えば、近美のコレクション展などを開催するときに、北海道ならではのところを旅行者にアピールしたり、あるいは、札幌を中心とする美術の展示であれば、北海道も広いので、知床や帯広、稚内の方から来る方たちにアピールするような現代的な美術を見せたりする。そうすると、違った文化が生まれるのかなとも思います。また、旅情を誘うような題名をつけたりなどすれば、魅力的に感じてもらえるのではないかと思います。

もう一つは、先ほど、吉崎委員からもご意見があったとおり、「へそまがり日本美術展」の解説文については、私もよくできていて非常に素晴らしいと思いました。例えば、この後に開催予定の「サンリオ展」ですが、サンリオがどのようにアートと結びつくのかということや、日本のサンリオは海外での評価もとても高いですが、どのように世界から認められているかということなどを俯瞰して説明されると、美術館の役割としても意義深いものだと思います。また、子供は1人で美術館に行くケースはあまりなく、親が連れて行って鑑賞するということが多いと思いますが、子供た

ちも自国の文化にすごく親しみをもって味わうことができると思いますので、そのあたりも解説文で、ぜひ素晴らしいものができればと期待しております。

ウ 事務局から資料1-2（三岸好太郎美術館）について説明

エ 質疑・意見

【北村会長】

アートギャラリー北海道は、近美や三岸だけではなくて、北海道全体の美術館と連携をしていると思いますが、美術館がアートギャラリー北海道の活動を通じて、どのような活性化が起こるのか、どういう波及効果があるのか、まだ私にはよく見えないのですが、この後、この事業はどのように進められるのでしょうか。広い北海道で各館が連携して、北海道全体を1つの美術館のようにしていくというのは素晴らしい理念だと思うのですが、現状はどのようになり、また、この先どこに向かっていくのでしょうか。

【松田副館長】

アートギャラリー北海道に関しては、現在、道教委の文化財・博物館課で、今後どのように進めていくべきかについて、見直し作業を進めていると聞いています。

そのために、全道のアートギャラリー北海道参画館に対してのアンケート調査なども実施しており、その結果の中で、参画館の中からも、参画しているメリットがなかなか感じられないといった意見もあったと聞いています。今後、参画館に対して、どのような形でメリットを感じてもらうか、といったこともテーマとして考えながら、今後のあり方を検討していくということを聞いています。

【飯田委員】

先ほどの説明で松前高校との連携という話が出てきていました。学校との連携という取組みが色々な形で進められていて、それは、とてもよいことであると感じていますが、私の立場で言わせていただきますと、高文連、北海道高等学校文化連盟という団体がありますので、単独の学校との連携だけではなく、団体や協会などとの結びつきは、もっと開拓できる可能性があるのではないかと感じます。

というのは、例えば、カフェやミュージアムショップの活用、もっと言いますと、ミニコンサート、北海道デジタルミュージアム、アートギャラリー北海道など、正直申し上げて、我々団体や協会、組織の者でも美術館がそのような取組をしているということを知らないということもあるのではないのでしょうか。

そういう意味では、近代美術館や三岸好太郎美術館からのアプローチよりも、我々の情報収集も大事かもしれませんが、少なくとも、周知をもっと深めることによって、色々な活動に結びつくこともあるのかなと思っています。

例えば、可能かどうかは別として、北海道の高文連に関しては、支部が11ありまして、それぞれの支部で一番直結するのは美術専門部の支部大会だと思いますが、例えば、支部大会の時に、前任でいた後志管内であれば、倶知安町の小川原脩美術館の学芸員の方に来ていただいて、レクチャーいただく場面を設けるような支部の美術専門部の取組みがあったと記憶しています。また、全道規模の大会では、近美や三岸好太郎美術館とのコラボ・連携が出来ると、我々としてもより良い研修に繋がるのかなとも思います。

美術館の取組の周知を、学校単位で行うことはもとより、高文連の美術専門部などの団体と連携することでより周知が深まる可能性があるのではないのでしょうか。

【松田副館長】

非常にありがたいお申し出と受けとめさせていただきました。我々も、展覧会を行う際に、広報活動として、ポスターやチラシを色々な場所に送付させていただいているのですが、学校に送付する際には、学校単位で、直接学校に届くような形で、1枚1枚、個別に発送するという活動をしてきたのかなと思います。今のご意見を受けまして、そういった団体との連携も重要であると思えますし、ぜひそういった形での連携も検討させていただきたいと思っています。

【三澤委員】

展覧会などについてSNSで情報発信していただけると、「こんなことを今やっているんだ」と思ったら、みんなに情報をシェアできたり、「こんなの観てみたいね」というのをお友達や子供に

スマホで見せることができるので、これからもSNSでの発信はしていただきたいと思います。近代美術館はHPやSNSで情報はよく見かけるのですが、三岸好太郎美術館については、あまり情報が載っていないので、少し残念に思います。

【中井委員】

一つ一つの展覧会が、いかに学芸員の努力が反映されているものかということは、私自身も展示を観たりしながら感じ取っていて、本当に前日まで皆さん夜遅くまで、時には徹夜に近いようなこともされながら、努力されているというのは伺えております。

その一方で、道の職員ということで仕方がないのかもしれませんが、学芸員の異動ということが、とても残念だなと思っています。例えば、三岸好太郎美術館のように、1人の作家の研究をずっとしていかななくてはいけない、その時代背景など、やや専門性を持って研究しなければいけないようなところに配属をされて、そこを3、4年で異動してしまうことが結構多いと思います。そうすると、それまで積み上げてきたものに対して、学芸員の皆さんのモチベーションなどはどうなのかと思っていました。それは、三岸好太郎美術館に限らないと思うのですが、近代美術館でも、ずっと手がけてきた展覧会が何年か後に開催されるということで、ずっと準備をされてきたのに異動になってしまう。そのあたり、学芸員の皆さんがどう思いながらお仕事されているのかなと考えたりしています。

それから、展覧会を観るときに、私は、必ず音声ガイダンスを借りるようにしています。今回の法隆寺展では、音声ガイダンスがなくてちょっと残念だなと思ったのですが、展覧会が混んできたりすると、一つ一つの字を読むのにすごく時間がかかってしまいます。展示室には書かれていない説明文がガイダンスの中にだけはあるということもあり、ガイダンスの魅力を感じています。

ただ、機械がすごく重くて、全部取りかえるとするとすごく時間がかかるかもしれないのですが、展示を見ている1時間や1時間半の間、重たいガイドを首から提げて立ちながら見ていると、展示が終わったころにはぐったりすることもありますので、今後、展示を快適に見られるような工夫も考えていただきたいと思っています。

【北村会長】

後者の機器の問題については、なかなか近代美術館だけでは解決できない、全国、全世界的な問題で、おそらく、開発が進めば、もっと小型で軽量のものが出来るのではと考えます。

ホスピタリティといいますか、観覧者の側から見て、何が一番快適かという視点は大事だと思います。

前者の学芸員の人事異動に関して、吉崎委員はこれまでのご経験から、どのように思いますか。

【吉崎委員】

私のいる財団の場合、学芸員の異動先は、同じ札幌市内ではありますが、札幌芸術の森美術館と本郷新記念札幌彫刻美術館、札幌文化芸術交流センター S C A R T S の3つです。

本郷新記念札幌彫刻美術館は開館して41年経ってしまして、これまでの学芸員がずっと積み重ねてきた研究がある程度蓄積されているのですが、実はまだあまり研究が進んでいない資料などもたくさん残っています。本郷新の研究をどう深めていくかということを考えてとき、一人の学芸員がずっと長く続けるということも有効ではありますが、学芸員が変わることによって、新たな視点でその資料と向き合って、違う切り口から研究が進むということもあると思っています。

ですから、研究をいかに次に受け渡すような形で残せるか、そして、それに新たないろいろな考えが加わって、さらに深めていけるかというのが、こういう個人美術館の、そして、また学芸員が変わっていく上での鍵なのではないかと思っています。

【北村会長】

専門性を極めるという点では一箇所にいた方がいいかもしれませんが、様々な経験をして、色々な作品と向き合うという点では異動の機会があった方がいいかもしれません。それは、一概にどちらがいいとはいえませんが、こういう北海道全体の美術を見ていく中で、様々な館で、それぞれの文化などを守っていくというのが学芸員の資質を向上させる一つの手立てにもなっているのかなと思います。

【若原委員】

現在行われている「北の美のこころ」という常設展は、北海道の名品を集められていて、奥岡さんの言葉も非常に印象的で、もっと広めて欲しいと思っています。特別展の宣伝は結構されているのですが、常設展の宣伝はもっと出せないのでしょうか。

また、先ほど、オンラインアートや、連携の話もありました。コレクション展が始まる前に、それに関連するオンラインアートとの連携、SNSを使った宣伝など組織的な形で行われると、もっと関心を持って常設展に来ていただけるのではないかと考えております。

それから、作品を広める意味で、アートカードが借用されるようになってはいますが、アートカードの販売の予定はあるのでしょうか。一般の人も欲しい人はいるのではないかと思いますし、家庭に一つアートカードがあれば、美術に関心のある人がだんだんと広がっていくということも考えられます。国立美術館のアートカードは販売されておりますが、近美の場合はどうなのでしょう。

最後に、一番気になっているのが、やはり財政的に大変な状況とお聞きしております。特別展での収益が道に入らないということを非常に残念に思います。その準備や対応などに職員やボランティアが関わっているにもかかわらず、美術館に収益が入らないということは非常に気になっておりまして、それは今後改善される余地があるのかどうかということです。

予算のバランスが悪くなると、現在の美術館の整備もやはりどうしても遅れてしまいますし、遅れることにより昨年の水漏れのようなことにも繋がっていくと思います。非常に貴重な展覧会を予定しても中止せざるをえないという状況になるのは非常に残念なことです。美術館の保守管理、作品の保存などに直接関係する財政的な面でも、もっと改善される余地があればと思って御質問させていただきました。

【中村学芸副館長】

最初の2点については、私の方からご説明させていただきます。コレクション展の広報につきましては、昨年度から北1条のメインストリートに面した看板を増やし、それから、テレビでの広報も若干行いました。テレビ広報につきましては、予算的なことですか、様々な理由がありまして、なかなか実現はしていませんけれども、今後も機会をねらってそういった広報を拡大していきたい

と考えております。また、特別展に入ったお客様をどうやって常設展まで来てもらうか。特別展を観ると、お客様も疲れてしまいますけれども、今回は、北海道美術の大変いいものが出ておりますので、そのあたりをどうするかということ、もう少し工夫していきたいと検討しています。短期的なところでは、今回の法隆寺展に来ていただいたお客様を、どのように常設展に送り込むかというようなことを検討しているところです。

それからアートカードにつきましては、現在のところは販売の予定はございません。これは、販売ということ当初から考えていなかったのですが、もし販売ということになりますと、美術館協力会様の御協力を得ながら、売店での販売というようなことしか今のところはないと思いますので、ちょっと現実的には、販売はできないのではないかと考えています。

【松田副館長】

実行委員会展の話ですけれども、この実行委員会について課題があるという認識は、我々近代美術館も持っておりますし、道教委、文化財博物館課としても課題意識は有しています。

この実行委員会展につきましては、少額の負担金で大きな展覧会を実施することができるということで、多くの道民の方に鑑賞の機会を与えるというメリットは当然あるのですけれども、一方で、先ほど御指摘のとおり、実行委員会展、特別展の観覧料が収益として、美術館に入ってこないという大きな課題もあります。

この方式は、北海道方式と言われる独自の方式で、これまではこういった形で展覧会を続けてきましたが、歴史的な経緯もあり、難しい課題、予算上の面も含めて、多くあることは事実でありますので、今後、他の都府県のやり方なども研究しながら、少し時間がかかるかもしれませんが、研究・検討は続けていきたいと考えています。

(3) これからの北海道立近代美術館検討会議について

ア 事務局から資料2について説明

イ 質疑・意見

【北村会長】

私もこの検討会議の委員の1人として、出席しています。今、説明があったように、皆さんからいただいた意見をまとめたものはちゃんと私たちの検討会議に届いております。ありがとうございます。この後もまた、そういう機会があると思いますので、ぜひ、よりよい方向になるような意見を賜ればありがたいと思います。委員会での議論は、ここで一つ一つ説明することはできませんが、資料2の2枚目にあるミッション案、コンセプト案は、これも前回の検討会議では、議論百出して、どのようにまとめるかについて悩まれていることと思います。是非、大いに悩んでいただいて、新しい形の美術館がどうなるのか、オープンワークショップなどでも、様々な意見が出ていますので、より良い形でまとめられるように、少しでも協力できたらと思っています。

また、検討会議の中では、先ほどの実行委員会方式のあり方についての問題提起などもされています。さらに、これまでの検討会議では、課題として出ていませんけど、先ほど、議題1号の最後に出ていた予算書の中でもわかるとおり、調査研究が美術館の基本的な重要な役割だと言われながら、それに与えられている予算が極めて少ないところもあります。施設が新しくなることについての検討はむろん必要ですが、実際に美術館をどう動かしていくことについても考えていかなければならないと思います。この件に関しては、機会があれば、検討会議で発言したいと思っています。

今の段階で、これからの北海道立近代美術館のあり方検討会議について、御質問、御意見、お伺いしたいことがあれば、お受けします。よろしいですか。

今後、また、皆さんのところに意見聴取依頼があって、今年度中に、この検討会議のまとめをするという形で進んでおりますので、何か御意見があれば、期日を待たず、お寄せいただければと思います。

(4) 美術館評価システムの改善について

ア 事務局から資料3について説明

イ 質疑・意見

【北村会長】

評価するというのは大変難しいですが、大事なことだと思っています。

他の館で評価に関わっている湯浅委員、こういう評価システムで、何か気をつけておくべきことがあれば御教示いただけますか。

【湯浅委員】

三岸好太郎美術館の報告書も拝見しますと、やはり近代美術館と三岸好太郎美術館の評価を比較してしまうので、例えば、こちらがDで、こちらはCで、本当にその評価が正しいのか、また、細かい記述を見ますと、「満足度は維持した」「とても意義ある展覧会であった」などの記述があるにもかかわらず、Cの評価はなぜか、ですとか、そのあたりがぶれないようにする必要があるかなと思います。

それから、先ほど申し上げましたけれども、Dであった評価の場合には、翌年度どういう計画にすると課題をクリアするための計画となるのかというところを明示すべきかと思いました。

また、三岸好太郎美術館については、近代美術館と合わせるのであれば、指標値や実績値に斜線を引いた部分は定性評価になるのか、など、そのあたりの整合性をつけて、両方の資料を総合しながら、齟齬はないかというあたりを見ていただければと思いました。

【霜村委員】

当館はまだこういう評価システムが導入されていないので、逆に参考にさせていただいているところです。

まだ来館者のアンケートなども取り始めたところで、評価についても、どうすれば客観的に捉えることができるのかというのは課題だと思います。主体的に事業展開をしていますと、来館者の動向というのは把握できない場合がありますので、そのあたりを美術館の事業にどのように結びつけていくかというところが課題なのではないかと思います。検討されている方達は内部の方や行政のチームの方々だと思いますので、客観的に、一般の目線というのはなかなか入りにくいのかなと感じたところがあります。

【吉崎委員】

近代美術館と三岸好太郎美術館で、同じ評価項目でいいのだろうかと思いました。それぞれの役

割が違っていると思いますので、それぞれがやっていかなければならないことも多少違ってくるのではないかと、また、そうした中で、同じ評価項目でやっていくと、どうしても無理が出てくるころもあるのではないかと思います。

美術館は、どうしても入館者数、あるいはその予算的なところで評価されがちですので、このように違う指標を作っていくということがとても大切なことなのですが、評価結果を次に有効に結びつけていくうえで、それぞれの美術館が、社会的に、あるいは世の中のために、何をどうしていくところなのかということが大きな考えの基になっていくべきだとこれを見ながら思いました。

そのあたりも含めて、本当に一律でいいのか、少し館ごとに変えた方がいいのかも検討されてもいいのではないかと思います。

【大石委員】

美術館評価は、それぞれの美術館で個別に行うと、一律で見たときに、齟齬が生じやすくなるので、美術館の規模や町の人口などで、ある程度差をつけて評価するのがいいと思います。

旭川美術館の場合は、協議会委員の方から、かなり肯定的な意見が出ていますが、美術館の方では、割と低めに設定しやすいところもあります。A B C D評価なのに、なぜかAは必ずなかったり、美術館が大体Cとしているところは、委員からはBでよいのではないかなどの意見があったりしますので、ルーブリックのようなものを作れとは言わないですけども、論拠にするべきところがあってこそその評価だと思います。

結局、先ほど、湯浅委員もおっしゃっていたように、その次に、それをどのように改善していくのかとか、あるいは改善の見込みがどの程度あるのかということも含めてこそその評価だと思いますので、次回の改善に繋がるための評価の設定ということが、おそらくとても重要になってくるのではないかと思います。

今後、どのように新しい展開をしていくか、どのようなキャラクターを、その美術館がそれぞれ培っていくのが地域に一番益をもたらすのかというところを視座にして、そこをしっかり設定していくということが非常に重要ではないでしょうか。特に旭川美術館の場合は、近代美術館ほど多く

のお客さんが来るということではないので、やはり、そのあたりを視座にしながら進めていくことが重要ではないかという意見も、協議会の会議ではよく出ています。

【北村会長】

今回の評価でも、その成果と課題という形で、どういう問題があるのかというところまでは、認識されているので、それをどのように次のアクションにつなげていくのかというところまで、この評価を発展させていただければ、大変意味のあることだと思いますのでご検討ください。

私たちには、次の協議会までに評価に関して何かしらの意見などを求められるのですか。

【松田副館長】

次の協議会の中で、評価の検討結果をお示ししたいと考えております。

【北村会長】

それでは、よろしく申し上げます。

以上で、本日の議事をすべて終了いたします。皆様、熱心な議論をありがとうございました。

【議事終了】

事務局から次回協議会の日程等について事務連絡を行い、すべての議事を終了。